

ユートピアとノスタルジア、ひたすら物質的豊かさを求めた戦後世界

—未来に向けての見当識の可能性、歓喜と欲望は、必要より根源的—

青野豊

若林幹夫氏の著書名は『ノスタルジアとユートピア』である。私はこの言葉を、逆にしたい。若林氏は人々の意識を歴史的に分析しているが、私としては、未来へと視線を向けてこうしたい。夢物語ではない現状分析に基づく未来展望を提示することが、今の私たちのなすべきことであると考えている。

でも、このような私の意識は、ノスタルジアの一種なのであろうか。人々を前向きに動かすものを失っている時代の今、この意識は、かつて多くの人たちが視線を未来に向けていた時代を懐かしんでいるだけなのであろうか。

- 変わるべき時に変わらない人たち、● 汗して働かない人たち、
- 自分の言いたいことだけしゃべり、人の話を聞こうとしない人たちが、いる。

* 印は、出典や私の補足である。『ノスタルジアとユートピア』等の著書からの引用は、斜体である。

1 若林幹夫『ノスタルジアとユートピア』(岩波書店)の序章を参考にして、

〈人々の意識の在り方の変化〉

ここでは、見田宗介氏と大澤真幸氏の著作を参考にして述べている。見田宗介氏の『現代日本の感覚と思想』(講談社)では、戦後の人々の意識状況を三段階に分けている。ここで示している「理想」と「夢」と「虚構」は現実ではないという意味で、現実と対になっている「反現実」を表す言葉である。そして、人々の心を動かした言葉である。

理想の時代—1945年から 1960 年

戦前の国家体制や社会を変革して、より自由で進歩的・民主的・文化的社会を築こうとすることが、多くの人たち(特に若者たち)にとって、その時代を生きる現実味をもっていた時代である。現実に理想が対置され、多くの人たちの心を動かした。理想実現に向けた活動が、生きていく意味を豊かにしていた時代である。

夢の時代—1960 年から 1975 年

理想を社会の中で実現しようとする意識は後退したが、経済の高度成長の波に乗って個人的夢を求めてそれを実現していくことが、物質的豊かさを求めることが進歩的である、とされた。この夢が生きる人たちを勇気づけていた時代である。社会のありようは、確実に、急速に変化した。そして、物質的に豊かになっていった。今日よりも明日が、そして明後日がよりよくなると期待できた時代であった。

● 理想や夢は現実とは一致しないが、この一致しないことにこそ意味があった。ここ

には、イデオロギー性とユートピア性が含まれていた。実現に向けて、人々は行動し働いた。

虚構の時代—1975年から1990年

経済成長による大衆消費社会の到来で、社会の中で起こる現象が非現実的演技や虚構のように感覚されてしまう、この世を生きているという現実味の希薄化のなかで、より楽しい虚構を求め、それと戯れることがより素晴らしいとされた時代である。一言でいえば、物と情報があふれ出した時代であった。そのために、これは先の二つと異なり、生きている意味、現実感覚が希薄となっている。有り余るほどの商品に埋もれて、消費生活に生きているということに意味を見出している。

●つまりは、理想も夢も人々の心に響かない。しかし、まだ何者かを求めているので、まあ、視線を未来に向けた一つのユートピア志向かもしれない。

〈見田宗介『現代社会の理論』より〉

「2006年にある種社会的な話題となった映画『ALWAYS-三丁目の夕日』では、1958年という、高度経済成長始動期の東京を舞台としている。この映画のほとんどキャッチコピーのように流布した標語は、「人々が未来を信じていた時代」というものであった。「未来を信じる」ということが、過去形で語られている。1958年と2006年という50年くらいの中に、日本人の「心あり方」に、見えにくいけれど巨大な転換があった。」
 「1950、60、70年代くらいまでの青年たちにとって、現代よりもずっと素晴らしい未来、よい未来、豊かな未来が必ず来るということは、ほとんど当然の基底感覚であった。それがどのように素晴らしい未来、であるかについて、さまざまなイデオロギーやビジョンが対立し、闘われていた。21世紀の現在、このような「未来」を信じている青年は、ほとんどいない。人々の生きる世界の感覚の基底の部分に、沈黙の転換はあった。」

この意識転換は、NHK放送文化研究所が5年ごとに行っている「日本人の意識調査」にはっきりと現れている。この二つの時代の明瞭な変容を、少なくとも次の二つの領域で見ることができる。*見田氏は、この調査に関わっていた。

「第一の顕著な変化は、〈近代的な家父長制家族の解体〉と呼ぶべき一群の変容である。…ナショナリズム、天皇制、職場や地域の関係の意識などよりも以上に、「家族」と関連するジェンダー関係の理想と欲求とモラルの領域に集中してきわだっている。」

これまでの男女の、夫と妻のはっきりとした役割分担は、経済成長の推進力となっていた。しかし現在は、専業主婦と企業戦士による家族像というものではなくなってきた。そして、性規範、性的関係は結婚や婚約を前提としてのみ許される規範は、すっかり消え失せてしまった。従来の家族観は、大きく揺らいでいる。生殖とセックスは大

きくかけ離れた。家族は大きく変化し、瓦解して来ている。

「…第二の大きな兆候は、〈近代合理主義的な世界像のゆらぎ〉というべき変容である。」

あの世や奇跡、そしてお守りやお札の効用を、それとはなしにそれなりに信じようとする傾向が強くなってきている。科学の発展に期待することが、薄れている。そのため、神社や寺にお参りすることへの抵抗感が薄れている。精神の自律・自立を求める意識(人生の羅針盤作り*)が減退してしまい、その時々 of 流行に敏感に反応するレーダー機能*ばかりを高めている。このような意識状況のため、怪しいカルト宗教が流布しだしている。*レーダー機能と羅針盤、これについてはリースマンの「孤独な群衆」を参照

さて、人々の生きる世界に対する感覚の「沈黙の転換」がどうして起こったのであろうか。私(青野)なりに考えられることは、二つある。一つは、若者たちが「情報化/消費資本主義」の中に漂っているためであろう。これはまさしく「情報漬けの便利さ」ばかり求めているためである。私たちの青年期は、今と比べて情報は限られていた。情報が多すぎない方が、未来は明るく見えるのだ。実際は大苦労の連続であったが、…。今の若者は詳しく知りもしないのに、いろんな情報は次々と飛び込んでくる。人生の苦労はしてみないと分からないのに、初めから意気消沈している。子供のうちから未来に絶望しているとも言えよう。女子高生が自分の事をオバサンと言う。便利さを求めすぎて、他の人たちと比較(レーダー機能)ばかりして不幸になっているようだ。もっと便利な、もっと素敵なモノがどこかにありはしないかと探し回り、心が落ち着かない。情報と、うすっぺらな便利さに振り回されているのではなかろうか。そして、額に汗して働くことを嫌がる。これはもう、日本社会の崩壊の前兆であろう。

私たち(青野、1951年生まれ)の時代は、今貧しい生活をしていても、いやそれ故に、未来には豊かな生活をしようとする意思があった。未来は漠然とはしていたが、良いことがありそうだと期待した。思想の力が生きていた。また、戦後の経済成長によって、社会的流動性が極めて高かった。貧富の格差は明らかにあったが、未来に期待していた。この期待感のため、露骨な格差を絶望的なものとする意識にとらわれなかった。田舎では農地解放によって、戦後の民主化の改革で、貧富と家柄等による差異が小さくなっていった。社会が、大きく変化していった。自分の周りの環境が次々と年々変わっていった。戦後日本の新しい家族は、ちゃぶ台の代わりにミカン箱一つの生活から出発した。炊飯器を手に入れ、テレビと冷蔵庫を手に入れるために懸命に働いた。

* 思想の力の弱体化、つまりこれは「近代文学(小説)」の役割が終了したということ、主体性の確立に向けて苦闘する若者がなくなってきたということであろう。そして、文学が倫理的・知的な課題を背負うがゆえに影響力を持っていた昔の社会状況では、ないということである。このような意識の転換を認識しなくてはならない。

今の青年たちにとって、自分の周囲の生活環境の変化が私たちのころに比べて少ない。日本の社会経済の大きな成長は、もはやない。この変化しているという体験が薄い。そして、物質的に豊かな時代に生きていて、家の中からあふれ出ようとするたくさんの品々、小さいころからのたくさんの子供用の遊び道具に囲まれてきた。漠然とした未来への淡い期待などない。未来社会が素晴らしく良くなるという期待感もない。昔のような火傷するような熱い思いが、ない。そのため、現状を幸福であると見なして保守的になっていることが、うかがわれる。変化をあまり求めない、という意識になっている。不満があっても、社会的不正があっても、自分の周りの小さな世界にとどまろうとしているようだ。静観・傍観するという、最悪のパターンの行動形態をする人たちが増えてきた。まあ、こう思わないことには、希望あふれる未来への視線がないのだから。そして、額に汗して働くことを嫌っている。

このために、これまでの物質的な生活条件の獲得に努めていた 20 世紀型の左翼や革新勢力の要求は、青年たちの心に響かなくなった。これは、今までの政治装置とその方法の「失効」ということを意味している。伝統的な左翼組織の弱体化という現象が起きている。

スマホを片手に持ち、歩きながらも見ている若者、食事をしながらもスマホを操作している人たちがいる。私には、理解不可能である。食事中に、スマホをいじって何が楽しいのか。家族と話をしながら食べたら、料理がおいしいと思うが、……。これは、私の長男の事でもあるが、もう、どうにもならない。情報の波に飲み込まれてしまって溺れていることに気付いていないのだから、……。

そのために、現代社会の若者たちは未来への希望が持てないため、働く者たちの連帯を守ろうとしてきた労働組合等の組織の影響力が著しく低下したため、彼等を支える組織と人がいなくなったために、生活が苦しくなったり、精神的に生きづらさを感じると、自分とは異なると思える人々を排除したり差別しやすい意識状況にいる人たちが結構いるということになる。これは、部落差別や在日の人たちやアジアの人たちへの差別心として現れてきている。

これは、悲しいかな、知的理解力も十分育っていないことの表れでもあろう。これは、日本の教育制度が悪いのだ。偏差値教育がもたらしたものである。

不可能性の時代 1990 年-

〈人々を前向きに動かすものを失っている時代、

商品交換関係に、資本にからめとられている私たち〉

これは、大澤真幸『不可能性の時代』(岩波新書)で述べているものである。虚構的な事柄がより深く広くなり、生きていくことを身体的にも精神的にも苦痛なものとして感覚させられてきた時代である。生きていくことの意味が、簡単には分からなくなってきた

た時代意識である。「自傷行為やテロを極限的な表現とするような現実」を求める人たちが出てきた時代である。

まとめて言えば、理想も夢も、そして虚構さえ現実を超えていくものとして志向されなくなった時代である。つまりは、きわめて閉塞感の強い時代である。この時代は、これまでのように「不可能性」という可能性を見出すことに現実味があるわけではない。「理想・夢・虚構」等の反現実が、もう人々を前へと突き動かすものとはなっていない。そして「理想」「夢」「虚構」という「反現実」によって現実を意味あるものと認識して、私たちを一步前へと動かしてきたものが、なくなったということだ。これは、危険な意識状況となっていると言えよう。そのために、ノスタルジーとナショナリズムが呼び出されてきた。この意識が、生きていくことを意味づけているようになってきた。この方向で現実には穴をあけ、その向こうを志向しているとも言えそうだ。宗教的であったり、ナショナリズムの意識にとらわれたり、……。これは、未来は輝きを失い、かつての時代に多くの人たちに信じられていた未来は、人々の視野から退場しようとしているということの現れである。

そして、未来のユートピアに代わって、失われた本来性なるものを志向するノスタルジアが、過去に素晴らしい社会があったとして、起源や原理が見いだされ呼び出されてきている。昔のような経済成長がもう一度訪れることを夢見て、……。人々が助け合った時代があったとして、そしてその実現を阻んでいるものとして、ある外国や少数派の人たちに対して差別的排外主義を主張しだす。「自分は悪くない。あいつらがいるからいけないのだ」と。このような意識が、社会の様々な場所で噴出している。視線が未来から過去へと、……。これは、「歴史の危機の時代」そのものである。近代社会そのものの行き詰まりを示している、と言えよう。

〈人々を前向きに動かすものを失っている時代〉

久しぶりに、西研の『哲学の練習問題』(NHK 出版)を開いた。この本は、1998 年に出版されている。私にとっては、20 年以上昔に読んだ本である。ベッドのある部屋の本棚に並んでいたもので、何気なく手に取った。昼寝の後である。いつも午前の労働を終え昼食を済ませるとごろりと横になることにしている。目覚めたのは午後 1 時半過ぎ、もう寝ることをしたくなくなり何気なく手を伸ばした。前書きを読む。……。

これは、私の意識を、再度確かめるのに適していると思った。西研氏は、次のように述べている。この本は、現在の社会が、若者たちが未来に対して希望と理想に夢を膨らませている状態ではないことを前提として叙述している。

「今の時代は人を強く前向きに動かすことを失っている。かといって、かつての共同体的な生き方に立ち戻るわけにもいかないことも、誰もが分かっている。そしてこういう時代だからこそ、人間とは何を求めて生きる存在なのかという古来からの哲学の問い

が、今切実なものとして浮かび上がってきているのだと思う。」

「人間って変な生き物で、ただ食べるだけじゃ満足しない。どういうことに人間は燃えるのかを考える必要があると思います。」

ここに、現在社会を「不可能性の時代」と名づけることができることが説かれている。このような時代状況の中に生きているものにとって大切なことは、物事の基本的なことから考えていくことが、「何について考えるべきか」を考えていくことが最も大事なことであろう。

2 人は何故、ユートピアやノスタルジアの意識にとられるのか？

若林氏はこの本の序章の最後に、次のように書いている。

「私たちが現在どこにいるかという見当識を得ること、そこからほんの少しだけ、私たちの未来に向けての見当識の可能性を展望すること、それがこの書物の主題である。」

* 見当識とは、日付や現在の時刻、場所や周囲の状況、人物の把握などを総合的に判断し、自身が現在置かれている状況を把握し理解する能力のことをいう。精神機能の統合が欠如してしまい、さまざまな日常生活を送る中で障害となってしまうと「見当識障害」と診断される。見当識障害は認知症の症状の1つある。

私たちは、今現在の目の前にある世界を超え出る時間と場所を求めることで、この直接触れることのできる、日々の生活で知覚できる世界で生きていくことの意味付けをしている。こうすることで、自分をこの世界の中に位置づけることができている、ということなのだ。ここに、他の生物との違いがある。このことをはっきりと認識するには、ユクスキュル(1864-1944年)の「環境世界論」を参照するとよい。

* ユクスキュル(1864-1944年)の「環境世界論」

すべての動物はそれぞれに種特有の知覚世界をもって生きており、それを主体として行動しているという考え。ユクスキュルによれば、普遍的な時間や空間も、動物主体にとってはそれぞれ独自の時間・空間として知覚されている。動物の行動は各動物で異なる知覚と作用の結果であり、それぞれに動物に特有の意味をもってなされるとした。つまりそれぞれの生物が「主体」として、ある「客体」を、自分にとって意味あるものとして「知覚世界」で認識しないかぎり、その主体の「環境世界」には存在していないのと同じということになる。だから **私たちが「客観的」だと信じている、この目に映る世界は、世界全体から「主観的」にある一部分を型抜きしたものにすぎない。**人間は自分の感覚機能によって捉えた空間が普遍的なもので、そのひとつの大きな世界(宇宙)の箱の中に、各生物が配置され並存していると思っているが、実際はそれぞれの生物がそれぞれ独自の空間(小宇宙)を持っているということだ。人間は主に眼によって把握された視空間を主としているが、視覚ではなく触毛(触覚)によって空間を把握する生物もいれば、臭覚によって空間を理解している生物もいる。各

生物は、私達人間には決して想像できないような空間として世界を捉えている。これは、カントの認識論と関係している。私たちも、ここに述べられているような生物と同じように**世界全体から「主観的」にある一部分を型抜きしたものを認識しているに過ぎない。「物自体」の認識はできないのである**というカントの主張に通じている。

このことについて、若林氏は少しややこしく述べているが、ご一読いただきたい。
 「〈あること〉だけでは〈あるべきこと〉になりえないヒトという存在が、〈あること〉を超える〈他の時間〉や〈他の空間〉に、〈いま・ここ〉に〈あること〉を肯定し、意味づけるとともに、〈いま・ここ〉に〈あること〉の中に見いだされる欠如や困難が克服される時や場を見出し、そのような時や場との関係の中に自らを定位させて、世界の中に〈あること〉の見当識を社会的・文化的に創り出してきたということである」。

つまりは、〈あること〉だけでは世界の中に定位できないのが、人間という存在形式なのだ。それは、存在の不安とも言いえることである。そして〈あるべきこと〉として世界の中に自分を位置づけたいという当為への突き上げてくる思い、これが人間という存在の在り方なのだ。

日本の戦後すぐを生きてきた人たちは、この生きている現実とは異なる時間と空間に「理想」を求め、そして経済成長の中で「夢」を、そして消費生活にどっぷりと浸りながら「虚構」との関係において、この世で生きていることの意味付けをしてきた。しかし、未来へと視線を向けることが難しくなってきたのが、今の「不可能性の時代」である。

もう今はない昔の時代と社会との関係性で自分の現在を位置づけているのがノスタルジアであり、未来へと時間と空間を延ばして理想とする社会との関係性を通して自分を位置づけているのがユートピアである。これが、私たちが世界を了解して生きていくという、ことなのだ。

例えば、信仰を強く持っている人にとっては、その信仰の中で説かれている時と場が、今とこの彼方に存在していると信じて生きていくことができるエネルギーとなっている。今とこの地を超えた時間と場所を思考・志向していくことが、多くの人たちのこの世を生きていく上での世界感覚であろう。このような基本的なことを、踏まえなくてはならない。

3 戦後世界のしっぽを引きづって、未来への視線を失った!

「進歩」自体が年老いた

さて、今まで述べたように考えると、さらに言えることは、「理想」と「夢」と「虚構」、そして「不可能性」の時代は反復して繰り返されることが予測されることである。この「不可能性の時代」のさらなる深まりで社会経済が大きな不幸を被ると、人々は大いに反省して、今までの社会を変革しようという「理想」を抱く人たちが多くなるであろう。

そして、これは、私たちの人生にも当てはまるかもしれない。若い時は理想を抱き、されどそれがそのまま実現されることはなく、個人的な夢の実現に向けて努力し、うまく成功するとさらなる夢＝虚構へ陥ることが予想される。そして、人生を前向きにとらえることをやめてしまい老境へと向かっていく。

こう理解すると、今の日本社会は「不可能性の時代」つまり、老境の時代であることになる。しかし、これは、日本のことだけではない。世界的な趨勢でもある。「進歩としての歴史」を生きてきた近代社会という一つのシステムが、終焉へと向かっていると言えよう。このことについては、『ノスタルジアとユートピア』若林幹夫(岩波書店)を、ご一読いただきたい。

「進歩」自体が年老いたのだ。未来は今より進歩しているとする意識は、そうあってほしいという意識は、衰退してきている。そして、「未来」は今の現実が延長されたものに置き換えられようとしている。現状の延長線であり続けることが、唯一の未来＝現実だと、...。私たちは、歴史への意志と展望を失っている。

〈ユートピアとしての物質的豊かさ〉

だがこれは、特に日本の戦後の時代を振り返ると、物質的豊かさをひたすら追求してきたという結果が今日なのだ。人々は敗戦後の貧しさからの脱却を求め、物質的な豊かさを必死になって求めてきた歴史がある。この物質的豊かさこそ、誰にでもわかりやすい理想、有り余る品物に囲まれる生活という一つのユートピアであった。これは、大衆への訴えかけとして、最も効果的な現状と異なる「反現実」として作用したのだ。人々にとって、これは〈こうなってほしい(物質的豊かさ)〉という共通のイメージとして、強く強く定着していた。これは、発展途上国においても同じであるが、日本では、敗戦という精神的なダメージから回復するものとして、ひたすらに...。物質的豊かさを求めることが、「進歩としての歴史意識」となっていた。ギンギンギラギラに、...。これは、敗戦の理由として、人々は、アメリカの物質的な豊かさを、その格差の激しさを露骨に感じたのだ。教育勅語でガチガチに固められて教育された人たちの目を覚ましたのは、この国力の違い、物量の差であった。アメリカンデモクラシーというものではなくして。

この物質的豊かさを求める意識が戦前の日本の国家体制への批判とセットになった。入り混じって、つまり「理想」の国家・社会の建設と物質的豊かさがユートピアとなった。そして、その後、...、経済的繁栄のために、現在の日本社会で圧倒的に多数派である労働者たちは、その階級意識をすっかり失ってしまった。「反現実」としての未来が見えてこない。

そのために「変わるべき時に変われない人たち」、「働かない人々」が社会のそこかしこで目立ちだした。額に汗して働かず、人をだます詐欺が横行している。会社や公務員世界でも、...

「虚構の時代」以降、現在の日本では、このような物質的豊かさを求めることはユートピアとしては機能しない。これに代わるものが、見出せていない。そのために、「虚構の果て」、「不可能性の時代」と言える精神的状況があらわになっている。そして、昔とんでもない戦争をして苦しんだことを、忘れてしまった。

〈視線の変更を迫れる多様な未来像を!!〉

1970年代後半から日本では物不足がなくなっていき、単に商品を棚や店頭に並べただけでは売れなくなっていく。物にあふれる80年代のバブル景気、そして90年代のバブルの崩壊後、それまでとは異なる社会経済の縮小、悲観的な未来像が多くの人たちの心をとらえている現実がある。これは、物質的豊かさをひたすら求めてきた私たちが、次の時代を生きていく「反現実」を見つけることができていない結果である。今までの歴史からみて、あまりにも短い時間で大きく変化したために、私たちの思想がついていけていないとも、言えるであろう。

このような状況のため、人との会話がなかなか成立しない。思考が、未来へと向いていないのだ。日本社会では、どうも、少しずつ改革していくことが難しいらしい。西欧に比べて遅れて近代化・資本主義化を国家行政によって上から始めたこの国では、今もすべての事が行政の利権がらみに固められている。そのために、多くの人たちが利権にぶら下がることばかり考えて、新しい時代の諸条件に即した改革を志向しない傾向が強い。そのために、社会は柿が熟して熟して下に落ちるがごとき様相を示さない限り、自己変革ができないようだ。現代の情報・消費社会に埋没してしまっている人たちが多いことも、このようなことの原因の一つとして考えられる。

*ホイジンガーの『中世の秋』に、社会が熟して熟してどうにもならない、今から見ておかしい行動をしていた人たちのことが書かれている。ヨーロッパ世界が変わりかけるのは、十字軍を今のパレスチナに派遣してことによる。このことで当時の先進地であったアラブ世界に接触したことに端を発している。

現状では、私たちにとってまずなすべきことは、①今までの価値観、社会的なシステムの問題点を暴き出し、価値の相対化を促進させていくこと、つまりは、家族と社会がもっと壊れていくことを、これまでの組織や思考の解体を推し進めていくことである。崩れないことには、次の社会を形づける人たちが登場できないのだから。

しかし、これだけではいけない。②もっと大切な事は、相対化の後で何が見えて来るかということであろう。今述べたような状況は、多くの人にとってはっきりとした未来社会展望が提示できていないことも大きく関係していると思われる。だから、このことを考えていくことは大切な事である。

社会経済の衰退は、今まで歴史でも、多くの国や地域で見られたことである。例えば、イギリスは、世界の覇権国から見事に滑り落ちたではないか。そしてまた、アメリカも転落しようとしている。このようなことは、今までの歴史で繰り返されたことなのだ。

それなのに、この現実と歴史に目をふさいでいるのが、日本の多くの人たちの意識である。そして、悲惨な出来事は、明日に起きないであろう。自分がいなくなった後であろう、いや科学技術の進歩が明日を切り拓くであろう。そうなってほしいというかすかな希望的観測を抱いて、今の生活にすがりつく保守思想の虜になっている。視線が、未来へと向いていない。

このような現状の意識は、戦後世界でひたすら物質的豊かさを追い求めた(エコノミックアニマル)ことが大きな理由として考えられる。これ以外の視線を持っていないためである。

だからこそ、私たちは、未来へと人々の視線を向けさせていくための多様な社会像を提示しなくてはならない。視線の変更を迫れる未来像を提示しなくてはならない。

繰り返すが、もう、私たちの多くは、今日より明日が、そして明後日が今より豊かな世界になるという社会観は持っていないし、さらに便利になる明るい未来像を抱いていない。昔アメリカの未来社会学者は言った。「21世紀は日本の世紀である」と。あれは、何だったのか。私たちの社会は、バブルの崩壊後何年たっても、新しい方向性が見いだされていない。

しかしだからと言って、次の時代は物質ではなくして、思想、精神性を「反現実」として機能させなくてはならない、宗教の復興こそなくてはならない、なんていうのは、あまりにも愚かなことである。

さて、このようなことについて、この縮小社会研究会では、この大きな議題としては十分な話がなされてこなかった、と思う。社会経済の縮小の必要性、そしてその必然性をいくら指摘しても、現状の多くの人たちにまでは、この意見は届かないのだ。これまで、現在の「市場における貨幣による商品交換」が主導的な経済体制からの離脱を求めて、個々の具体的な取り組みの事例やアイデアの発表の研究会はなされてきた。しかし、どれも、今一つ、……。心に迫ってこない。

4 ユートピアの退化、ノスタルジアへ

そのために、過ぎ去った 20 世紀のまだ未来が信じられていた時代へのノスタルジアを抱く人たちが出てくる。「理想」を抱き、より良き社会を求めたあの時代への郷愁に浸っている人たちがいる。また、今も隣の人たちと比較して、ネタミ・ヒガミ意識にとらわれて物資的飢餓感にとらわれている人たちもいる。・・・戦後世界のしっぽを引きづっている。ここに大きな問題がある。今現在とは異なる生き方、生活の仕方もありうるというという思考回路が狭くなり、そして閉塞感が漂うことになった。

〈政治の右傾化、古代が呼び戻された「国民国家」と「国民意識」〉

まずは、このような現実、人々の意識状況は認めなくてはならない。そのうえで、粗悪なノスタルジア(ナショナリズム、ポピュリズム)に陥らないようにしなくてはならない。問題は、価値観の転換(崩壊)があったのだが、その代わりにこう<あってほしい>という未来社会についての展望を描くことができていない、ということである。

さて、このノスタルジアについては、間違っはならないことがある。もう今はない昔の時代と社会を賛美しているノスタルジアの意識は、その評価する過去は、実は、そのまま過去にあったのではない、ということである。過去のある出来事を意味あるものとして、見出したということなのだ。「伝統」や「民族」、そして「文化」なんていうものは、「国民国家」形成の時、さもそうであったのごとき想定されたものなのである。「想像の共同体」なるものを創造されてきたのが、近代社会である。以前には人々の日常を支えてきた共同体が瓦解した後で、新しく「国民」意識が創り出されたのだ。「想像の共同体」が成立したのは、そしてそのことが、このような過去の経緯が忘れ去られた時、「国民国家」は成立した。そしてその国家間対立で、戦争ばかりしてきた歴史がある。だから、この私たちが当然なこととしている日本国という枠組みは、絶対的なものではない。

さらに述べれば、この「国民」という意識も、そして近代に形成された「国民国家・日本」なるものは、かつて人々にとってユートピアとして意識され形づけられた、言わば人工物なのだ。

「今まで存在していなかった社会を、現状において<あること>の問題を解決するための<あるべきこと>として人工的に作り出そうとしたものであるという意味で、国民国家はユートピアであったということである。」

「大日本帝国」なんていうのも、その名称からしてユートピア的なものであった。「大東亜共栄圏」も、ナチスの「第三帝国」もユートピアの誇大妄想化したものであったと言える。自分たちの主張を過去に投影して、新しく創り出したものである。ありもしなかったのに、さも昔あったがごとく。

「近代の革命や改革においては、しばしば「古代」—それぞれの文化・文明に固有のものとする「古代」が召喚される。伝統的宗教や信仰と共にあった文化的・社会的世界が解体していく中で、ネーションと国民国家は、未来のユートピアがその中で実現される枠組みなただけでなく、本来性としての民族・国民の同一性を担保するものとしても機能することで、<同じ過去を共有し、共に未来へと向かう者たち>として保守主義と進歩主義を調停し、媒介するトポス(存在根拠をしめす場所)ともなっていたのである。ネーションはそこで、現実である以前にまずユートピア的な神話の位相から、<あるべきこと>として<いま・ここ>にあることを方向づけ、意味づける。」

そして文化も、例えば「歌舞伎」を日本の伝統芸能としたのは、日本社会の西欧化、近代化の過程で、西欧と肩を並べて競合しようとした時期に、素晴らしい日本の芸能

として見出されたものである。明治の初めは、古臭い因習的なものとして排撃されたのが、日清・日露戦争の勝利の後、見直され選び取られたのだ。

歌舞伎は江戸時代の大衆演劇であり、今の吉本興業的なものであった。当時、歌舞伎は幕府からは低俗なものとして、繰り返し取り締まられ弾圧されてきた歴史がある。世に悪評をもたらすものとして、…。今のように高級な古典芸能として評価されていなかった。河原者として賤民芸能としてさげすまれてきたのだ。そして、役者たちは逮捕され、江戸所払いをされた歴史がある。

しかし、このようなことを相対化して物事を観ることができないのが、ノスタルジアとしてのナショナリズムである。困ったことなのだ。閉塞感の漂うこの時代、何者かに異常に思い入れて、そのことで生きていくことへの充実感を得ようとしているのが、昨今の姿である。

*この問題点については、青野豊「ノスタルジーがナショナリズムにつながらないために」を参照

5 <二>または、<多>である世界へ * 現在とは異なる別の社会を構想すること。

「<二>または、<多>である世界へ」とは、『ノスタルジアとユートピア』の終章の表題である。ここで、若林氏は、次のように述べている。

「成長と発展の現代における、そしてまた未来に向けてのあるべきありかたの指針として国際的に定められたのが、「持続可能な開発目標 SDGs」である。しかし、「それはグローバルに一つになった世界における改革目標の一覧表ではあっても、何か新しい社会のトータルなあり方や世界像を示すものではない。」

「SDGs は個別の目標を全体として結びつける社会や世界の積極的なイメージをもたない…ことによって、資本主義リアリズムを補完し、グローバルな資本の空間を持続可能なものとして、…終わりを回避して、現在における<あること>を将来へ持続させていこうとする意味で、現実主義的である。」

つまりは、「進歩や発展や成長それ自体が<あるべきこと>として…実現されるべき<未来>は経済成長率や人口数や出生数のように、しばしば具体的な内実を欠いた数値という抽象的な指数<だけ>になる。」

多くの進歩的と自称している人たちが述べる SDGs は、進歩としての未来像を指し示していないのだ。これでは、かつて信じられてきた進歩と未来は、ノスタルジアとなっているのであって、<いま・ここ>を超える<あるべきこと>が見いだされていない。

こうなると、私たちを勇気づけ視線を前に向けて動かすものが薄くなっていることになる。SDGs は、今・そしてここに生きていることの意味付けが、希薄化してしまっていることの証明でしかない。ユートピアは、現実へと下降してしまった。

二十世紀は、未来に大きな期待を抱いて始まり、ノスタルジアに終わったと言えよう。19 世紀から 20 世紀の半ばまで、進歩的であるとしてきた社会は、到達すべき未

来という観点から現在を考えてきた。例えば、あの東西の冷戦時代、この対立、異なった体制が存在しているという事実が、私たちにとって夢は可能であると思えるに十分な証拠となっていた。当時の知識人たちにとって、今住んでいる社会体制を間違っているものとして、この体制の外にある何者かを思い描くことができ、その批判的意識を維持して現実の日々を過ごしていた。

「歴史は依然として人間の自由な空間として想像(*創造)されるべきだと考えることを可能」としていた。

それが、21世紀の現在、この東西対立の一方が崩壊することで、「地球上のあらゆる場所が資本の活動へと開かれ、それによって世界はその空間の次元において、」ユートピア建設という社会構想は閉じられている。

そしてたどり着いた20世紀の終わりと21世紀の初めの世界は、ユートピアなんて言うものが実現されていないことを受け入れてしまったような意識状況となっている。人間や社会の今現在の状況を意味づけ、方向づけるものがなくなっている。もっと言えば、資本主義経済体制が存続可能な唯一の政治・経済体制であるのみならず、それに対する代替え物を想像することすら不可能だとする意識が蔓延している。「ここだけ」が、このような社会が、ユートピアであるとするメッセージが、繰り返しささやかれている。そのために、かろうじてノスタルジアに浸ることで、この世を生きていくことの勇氣と現実感を、どうにか保っているとまで言えそうだ。

そして、若林氏は、次のように続けて述べている。

「おそらく今後長期にわたり、持続可能な発展や成長を〈あるべきこと〉としたグローバルに一つになった世界が、成長の限界の到来を先送りし、そこに発生するリスクに対処できるに限り、続いていくことだろう。」

このような事態が、長く続くことが予測される。これこそが、大澤真幸氏の言う「不可能性の時代」なのだ。そして、このままでは、人は生きていくことに元気になることにならない。どのような社会で、生きていくことが幸せなのかということについて、私たちは明確にしていない。このままでは、人々を抑圧のままにしている、社会を破壊へといざないかねないことになる。世界は危機的状況へと、一步一步入り込んでいる。またまた、歴史の危機を繰り返そうとしている。だから、「〈二〉または、〈多〉である世界へ」と、私たちの思考の翼を伸ばさなくてはならない。

〈いま・ここ〉を超え出ようとしてきた者と、そうではない人たちとは、眼前の見えている景色まで異なっている。人生の意味も、違っている。

「資本主義と科学と技術を、無際限な成長と効率性の追求から解放する倫理、市場を媒介として組織される経済や、科学的な知の探究とそれに基づく技術の開発を、今日

の資本主義や科学技術によるものとは異なるものにする倫理を〈あるべきこと〉として構想することは、空想的なことではなく、リアルかつアクチュアルなことである。」

* real と actual の違い・・・real は外見と中身が一致していて、本物であること。actual は、実際に存在しているということで、本物であるかどうかは言及されない。

未来への展望こそが、人間的時間の本質なのだから、……。過去は刻々と遠ざかり、現在が束の間として通り過ぎ、その中で未来だけは身じろぎもすることなく私たちの前方に存在しているのだから。しかし、未来社会構想とは、矛盾のまったくない夢、理想社会を描くことではない。また、一個人ではなくして、社会の多くの人たちが未来へと希望を抱くものでなくてはならない。

一つはっきりしていることは、従来のマルクス主義的な唯物史観では未来は切り開かれまいであろう、ということである。この史観は、近代の資本主義社会においてのみ通用するものであるから。この歴史観は、「互酬的贈与」と「収奪・再分配」という二つの交換関係については、まったく通用しないものである。

*このことについては、「プルードンの経済原理の読解のために、「神の仮説」とは?—縮小社会への道—互酬的贈与経済の視線で読み解く—」を参照

6 思考の翼を伸ばす時、忘れてはならないこと!

〈歓喜と欲望は、必要より根源的、そして、……〉

●さて、この時大切な事を見逃してはならない、と私は言いたい。社会経済の成長が鈍化した後も、縮小しても、人には**歓喜と欲望が満たされ得る可能性が必要**である、ということである。このことを忘れて**縮小社会の倫理の押し付けをしてはならない**。「足るを知る」なんて言う倫理的な思想を強要してはならない。欲望を禁圧してはならない。社会は、「成長、そして変化と移動」がなされることで健全になるのだ。この視点を、忘れてはならない。そして、生きて行くには喜びが、この期待が持ち得るという状態の社会でなくてはならない。だから、**歓喜と欲望は、必要より根源的であるとも言い得る。これを感じ取ることができないのであれば、生きていることの意味を失うことになりかねない。**だから、必要という下限が満たされていて、この上の**歓喜と欲望へと開かれていない**といけない。

そして、働くことを、忘れてはならない。額に汗して働いてこそ、未来は開けてくる。このことを、忘れてはならない。この汗して働くことで、「**歓喜と欲望**」は、意味あるものとなる。

さて、縮小社会でさらに成長・変化することが健康的であるのは、**非物質的な様相を変えていくこと**であろう。この在り方を変更していくことが大切な事となる。喜びとしての情報の発信と交歓は可能性としてありうるのだから、この方向へと、欲望と感受性を転回していくことしかない。このような文化活動の意味を高めていくことが大切で

あろうと思われる。このようなことをするアソシアションを創り出していくことであろう。そこでは、商売で金儲けに終始する人生ではないであろう。人々の意識の在り方が、その質が変わっていることであろう。

だから、未来に対して諦めの意識を抱くこともないようだ。これまでの近代の思考を引き続いてしている人たちにとって、成長の停滞した世界は魅力の少ないものと感覚されるであろう。けれども、この時代の転換期を乗り越えた人々にとっては、

「アートと文学と思想と科学の限りなく自由な創造と、友情と愛と子供たちとの交歓と自然との交感の限りなく豊饒な感動とを追求し、展開し、享受しつづける」

* 見田宗介『現代社会はどこに向かうのか』(岩波新書)

こうであるかもしれない。そして、さらに楽しむことのできるものとして「社会的な生きがいとしての仕事、共存の環としての仕事」となるであろうと、見田氏は示している。

〈試行錯誤の未来社会構想を!〉

さて、もう一つ間違ってはならないことがある。自分なりの理想像を強要しないことである。齢を経ると、自分の意見ばかり述べるようになる人が増えて来る。その人の述べられたことに賛同しないと、「お前の感性はなっとらん。」なんて言われることがある。また、若者たちの中にも同じような人たちが増えて来ている。こちらの意見を述べたり、社会の現状とそれへの対応を説明しても、それは頭から拒否する。うう…ん。このような会話では、どうにもならない。このようなことを、私たちは、同じことをしてはならない。

カントが次のように言っている。カントは専制主義という言葉を用いているが、その意味は、「ただ単に騒々しい専制主義ではなく、歴史上に現れて来るさまざまな政治形態の背後に隠れていることもある声なき専制主義なのである。したがって、独裁者というのは、その本質を考えると、例えば自分自身は幸福に生きているが、市民たちにはその幸福の分け前を決して与えないような人間の事ではないのであって、むしろ、自分の考え方に従って市民たちに幸福となるよう強制し、市民たちが内面的に成年となる道程に立ちふさがる人間の事なのである。」

「カントが、…「未成年」という否定的概念を多く用いたのは偶然ではない。カントは次のようには書かないのである。「啓蒙とは、人間が内面的な成年へといたる道程の事である」。そうではなく、「啓蒙とは、人間が自分に責めのある未成年状態から脱却すること」なのであった。」

*『現代に挑むカント』ノルベルト・ヒンスケ著石川文康・小松恵一・平田俊博訳(晃洋書房)参照

啓蒙とは、自分自身に責めのある未成年状態から人間が脱却することである。未成年とは、他人が導いてくれないと考えることができないという状態を言い、自分自身に責めがあるとは、未成年であることの原因が知性を欠くところにあるのではなく、むしろ他人に導かれずに自分の知性を用いる決断と勇気を欠くためである場合そういうのである。大胆に知ろうとせよ!自分自身の知性を用いる勇気を持って!とはそれゆえ啓蒙の標語なのである。」

カント『啓蒙とは何か』小松恵一訳

カントの言う成年や未成年という言葉は、年齢でなく、法律用語でもない。個人の内面的な態度や考え方、人生に対する根本的な姿勢を問題としている。成年であることは国家から与えられるのではなく、自分自身が獲得するものである。他人が引き受けることのできない、自分自身の努力、自分の行為に関わる問題なのだ。さらに言えば、これは、「意志」の問題なのであって、進んで成し得ることが「啓蒙」なのだ。

しかし、人々には、自分を危険にさらさないという傾向がある。そして、誰もがよこしまな意識を抱く。そして、先に述べたようなソフトな専制主義者たちもいる。これは、確かな事である。人の道徳性は、そんなに高くない。これは、私も、同じである。カントはこのような事を、人間には根源悪があるとしている。それが、啓蒙を危うくさせている。意志することが、人間存在をささえているのであるが、それが、…。

また、この悪への傾向性に対する深い配慮がいる。ふと昔々読んだことのある野間宏の言葉がよぎった。人は肉体と言う袋、そして精神、さらに性(セクシャリテイ)に振り回されていると。男は、オスなのだ。どうしようもなく、メスを求める。愚かしいこともする。だから、男にとって、女の存在は必要なのだ。このことによって、動物的状态を脱することができ、至高の存在へと努めることができる。「鬼平犯科帳」の中で、鬼平は言っている。人は、「悪をなしつつ、善をなす」と。

このようなことを克服するのは、…多くの人たちにとって、そして私にとっても、難しいことであろう。だから、人間が成年となるのは、一つの統整的理念であり、そのまま実現することではない。でも、これの実現に向けての取り組みは止められない。各人を実践へと突き動かす衝動を誰もが持っているし、持っていたはずなのだが、…。

でも現実には、人間は自分自身で自分を導くことを放棄したり、また、別の人間がご親切にも現れて来て、私たちを彼等の指導の下に置いている。…。さらに一方では、人と協力して働くことを嫌がったり、ボランティアはアホのすることとする風潮が広がっている。

まあ、それでも、私たちは〇〇であることが可能であるかのごとく、さもそうであるかのごとく生きて行く取り組みを、続けよう。このことについて思考する時に、参考にするとよいのがカントの『永久平和のために』と『世界市民という視点から見た普遍史の理念』に書かれていることである。平和を実現するための、そして歴史を観る時の思考の軸、「形式」が、そして「導きの糸」が記述されている。カントが試行錯誤しているこの思考

過程は、参考となろう。カントは、人々が高い道徳性をもたなくても、未来社会への期待を持ち得る可能性について思考している。人間のもつ根源悪こそが、平和への条件なのだ、とも。この逆説的表現の意味を理解しなくてはならない。

*カントの訳文のページをめくるだけではこの事が分からないと思われるので、『悪を克服する哲学、カント、永遠平和のために』萱野稔人(NHK 出版)を紹介したい。訳文としては、『永遠平和のために、啓蒙とは何か、他 3 編』中山元訳(光文社)がよい。カントの哲学用語を使わずに翻訳している。

人間の人生は短い。何かのために努力しても、その結果を自分自身は享受できないことが多い。何かのためにたくさん活動しても、多くの人たちはその途中で死んでいく。これらの活動で得た成果を享受する人たちは、未だ見ぬ未来の人たちである。彼等はこの社会の実現に向けて努力した人たちに対して感謝することもしないということはよくあることである。消費文化に溺れている人たちに語りかけても、反応は鈍い。それでも、私たちは、今なさなくてはならないことをするしかない。これも、カントの言葉である。

私たちは理想像の提示・強要ではなくして、社会経済や人々の意識の分析を通して試行錯誤している実態を提示して、共に考えていくことが、現時点では大切な事であらう。このようなことを促進するような記述を試みるのが私たちの課題となろう。

さらに、個々人の描き出す社会展望は、そのまま実現されることはない。一つの夢の形として、…。ねじれ絡みながら実現されていくであろう。今までの歴史が示しているように、…。このことを、忘れてはならない。

終わりに

若林氏は、「あとがき」に次のように述べている。

「…渦巻や塹壕は、動き続ける流れや抜け出すことのできない停滞だが、天空を行く鳥はその外にも世界の広がりがあることを、そしてその広がりを自らの生きる世界とする者があることを指し示す。渦巻や塹壕のような世界や社会の中であって、自らはついに飛ぶことのない空を行くことや、その彼方の決して踏むことのない大地にたどり着き、帰り着くことへの希望や祈りをもつこと。「こういう時代状況」の中でも、そんな希望や祈りをもつ人間の能力が、〈いま・ここ〉の少し先、少し外側へと生きていくための見当識*を可能にするのではないだろうか。」

人間は、見通しのない中でも、〈いま・ここ〉を生き抜いてその先を目指そうとする存在なのだから、…。ここに書かれた若林氏の言葉を、かみしめようではないか。

現状の政治に絶望することは、愚かである。目を遠くまで向けて、…。

私たちが持たなくてはならない問題意識は、

① 私たちが現在どのような社会にいるのか、という見当識を得ること

② 未来に向けての見当識の可能性を展望すること、なのである。

社会が、多くの人たちの意識が変わることを待ってはいけけない。しかし、焦っても仕方がない。そして、次の言葉も、大切に懐にしまっておかなくてはならない。

「批判というものは解体するだけでは十分ではない。肯定し、再構築しなくてはならない。」 *プルードン『革命家の告白』山本光久訳(作品社) 第11章「私は何者か」

さらに、矛盾のない社会はないのだ。このことは、大前提として、理解しておかないといけけない。

「矛盾と格闘した」と形容した方が、プルードンの主観的なまじめさにふさわしいかもしれない。しかし、彼の真意は矛盾をねじふせて、美しい解決を導き出すことではなかった。わかりやすさを求める民衆は矛盾のない社会を夢見たりするが、プルードンに言わせれば矛盾のない社会とは(ありうるとしても)活気のない「死んだ社会」にすぎない。われわれが、まじめさを武器にして、まなじりを決して(ときには血を流して)求めるべきはそういう社会なのだろうか。たとえ矛盾は解消しても、それは問題の解決ではない。プルードンは社会の問題の解決は求めたが、矛盾の解消は求めなかった。矛盾(プルードンの言葉によれば「アンチノミー」)こそが、社会に動き(生命)をもたらすものだからだ。」 *齊藤悦則氏のHPより

人間の一生は矛盾ばかりで織りなされている。その矛盾の一つ一つがそれ自体、社会構造の一つのモニュメントであり、公的な秩序と家族の幸せの一要素なのだ。…。しかし、人間をその自己表出の総体において考察すると、人間は、その数々のアンチノミーがすべて出尽くした後においてもなお、一つのアンチノミーを表す。…。社会秩序は考えられる限り最高に完全なものであっても、それは決して苦しみや不安を一掃するものではない。この世における幸福は、我々が絶えず追求し続けねばならない理想であるが、この理想は、自然および精神の乗り越えがたい敵対のせいで、我々の力の及ばぬところである。

*プルードン『経済的諸矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』齊藤悦則訳(平凡社)

本の表題は「貧困の哲学」である。その第10章「信用」より

追伸

現状維持の政府(保守政権)を批判している人たちへ

青野の意見

—政治的意見と行動について—

特に問題なのは、このような現状維持の政府(保守政権)を批判している人たちの言動である。現在の政権を強く批判している人たちは、ともすると、夢の世界へ、理想の社会ということだけに思いを馳せている人たちがいる。でも、これは間違っている。私たちとしては、この理想へと向かう手段が最適化されるところに、目的を設定しなくて

はならない。

革新的意見をもっている人たちは、ともすると、保守意識の人たちに対して「意識が低い」と批判する。でも、このような「自分は正しいのに、あいつらは?」という意識の革新性では、社会は変わらないであろう。

現実の政治的意見と行動では! 政治に関する限り、理想が高ければ高いほどいいのではない。自分の夢に偏ったことを主張する人たちを支持するだけではいけないのだ。手段を、方法を最適化したところに目的を定められる人こそ、政治に携わる資格があると言えよう。こうすることで、よりよい未来の可能性を、現実の中に見出していく。現実に合わせて、その方策をさぐらなくてはならない。理想によって現実を否定するのではなく、現実の中に理想が実現する糸口を見出していく事が大切である。

一つだけ述べれば、…。政権交代がなされるためには、今の自民党支持層のうちの何割かが野党支持に変わらない限りありえないのだ。この当たり前のことに、気づかないのだ。いやいやこのことが分かっている、このようなことに目も耳もふさいでいるのだ。このような革新性など、意味のないことである。

現状維持の政府を批判し、社会変革を目指している人たちの言動は、悲しいかな、夢の世界に傾き、現実政治に関わっている野党に対して厳しい。そして、夢を語る政党・人を支持しようとしている。そして、そのことを、メールの上で語りだす。このような人たちは、自分の理想・夢を食べて満足しているようだ。これでは、何の改革もなされないことになってしまう。もたらずものは、絶望だけである。ここに問題がある。

また、強引に理想を取りに行く英雄主義は、支持も得られないし、現状維持よりも悲惨な結果を生む。このことについては、19世紀からのマルクス主義的思考とその実践に、問題点が明瞭に示されている。もっと言えば、マルクスを含む当時のドイツのヘーゲル左派の思考形態にこの問題が示されているようだ。当時の後進国ドイツの知識人たちは、遅れを取り戻す一発逆転の思想を求めていたのだ。

レーニンは最晩年、性急な権力の奪取、つまりロシア革命を後悔した。最後の発作で倒れる前、彼の作り出したソ連の体制を「旧国家の生き残りであり、ほんの表面を軽く塗り直したにすぎない」と述べている。

それともう一つ、人口の多数派である労働者たちが、階級としての意識を持っていないことを、認識しないとイケない。そして、工場で、会社の中で分断されているのだ、マスコミに踊らされているのだ、教育制度が悪いと述べるだけではどうにもならない。

現実には、階級としての敵が鮮明でない。そして、未来社会についての明確なイメージを持ってないのだ。これで、労働者としての階級意識が育つはずがない。未来へと視線を向けることができているという現実を踏まえて、述べなくてはならない。

私たちは、まずは、未来に向けての見当識の**可能性を展望すること**であろう。